

2014 年度グローバル・コミュニケーション学部
教育、研究、社会貢献活動に関する自己点検・評価結果について

1. 教育活動

本学部は2014年度、学部完成年度を迎えた。開設以来、各教員はシラバスに記載した授業内容や到達目標を踏まえ、補助教材、パワーポイントの作成、e-classなどの情報システムの活用をとおして、教育効果を最大限に上げるべく、鋭意努力してきた。演習系、講義系いずれの授業においても、頻繁な課題提出、クラスディスカッション、ペアワークやグループワークなどのアクティビティによる学生の積極的な授業参加を促すと同時に、きめ細かなフィードバックを与えて、学生の主体的な学びを促す工夫を行ってきた。また、最終学年の4年次生の授業においては、学びの総括として、ゼミにおける論文指導や、「Seminar Project」におけるプロジェクトの企画・運営の指導を行い、本学部が目指す実践と教養のバランスのとれたカリキュラムの理念を実現した。こうした教員の絶え間ない努力により、「高度な外国語運用能力を駆使して facilitator、negotiator、administrator として活躍できる国際人を養成する」という本学部のディプロマ・ポリシーを達成できた。

また、前年度に引き続き、1年次生の授業出欠状況に関する情報共有を組織的にを行い、指導が必要な場合は、学生を適宜呼び出し、学生との対話を重んじる教学指導を徹底した。

正課授業以外の教育活動の主なものとしては、学内外の留学生(同志社大学 ILA の学生、メリーランド大学、ロチェスター工科大学の留学生など)との国際交流イベントを開催し、異文化理解、異文化コミュニケーションのための環境を整えた。さらに、本学部学会の小冊子「Cosmos」発行にあたっては、学生編集委員自らが行う編集作業に適時助言を与えつつ、彼らの自主的な取組を支援した。このように正課授業、課外活動の両方をつうじて、主体的に考え行動する人物の育成にあたった。

2. 研究活動

教員は言語学、社会科学、教育学、文化研究、文学などの諸分野で、著書、論文執筆に加え、学会発表などをとおして活発に研究活動を行った。(詳細は、本学研究者データベース参照。(URL: <https://kenkyudb.doshisha.ac.jp/>)

3. 社会貢献活動

多くの教員が学会運営のための委員職につき、学外の社会活動に積極的に関わった。また、市民講座や東京新島講座での講演、高等学校からの要請による模擬講義への協力をとおして、研究の成果を社会に還元する活動を行った。さらに、京田辺キャンパスにおける同志社京田辺祭では、地元の子供たちに外国語を学ぶ楽しさを体験してもらう催し物を開き、地域社会への貢献も積極的に行った。